令和8年度
文京区学生と創る
アグリイノベーション事業
中間報告会

持続的な発展に向けた地域の農業生産と販売

東京大学
磯道駿介・八畑知礼・中川真璃愛・西沢美槻

中間報告会の内容

- **はじめに：私たちの取組み**
- テーマ１：水田の土地利用（2024年度から継続）
- テーマ２：米の品種選択（2025年度から継続）
- テーマ３：道の駅の直売所（2025年度から継続）
- おわりに：今後の取組み方針

私たちの目標

盛岡市では、様々な条件のもとで**多様な農業**が営まれ、

関連産業とあわせて**盛岡市の魅力**を支えている

盛岡市の農業・農村の姿を**地域全体として**捉え、

将来の在り方を考える

→農業・農村の振興を通した盛岡市の**持続的な発展**を考える

私たちの取り組み方針

農業経済学を専攻する強みを活かした取り組み

1. データ・調査結果の整理・分析・見える化

盛岡市から提供いただく資料や調査の結果は情報の集約化が必要

→データが細かく、盛岡市の姿を地域全体として広く捉えることが困難

→整理・分析・見える化を通じて、データ・調査結果を**活かせる形**に

2. 各テーマの学術的な考察・課題への対応策の検討

盛岡市の事例を、先行研究や他地域と比較

→盛岡市の農業・農村が抱える課題を、**農業経済学の視点**から考える

今年度のテーマ

これまで、地域の農業・農村を様々な面から捉えてきた

・農業・農村景観は、対象地域らしさを構成する重要な要素

・農業者をはじめとする、多様な担い手が農地・水路の維持を支える

・水田の土地利用は、生産条件や米をめぐる状況により異なる

→ **農地を維持しながら、どのように農業を続けていくかが課題**

今年度は、農地の利用・生産と、農産物の販売に着目

(1) 水田の土地利用：誰が・何を作るかの変化を2019～2026年で追跡

(2) 米の品種選択：誰が・どこで・どの品種を作るかを把握

(3) 道の駅の直売所：POSデータから、購買行動や地域産品の役割を把握

→ **農地の利用から、そこでの生産、農産物の販売までを捉える**

中間報告会の内容

- はじめに：私たちの取組み
- **テーマ１：水田の土地利用**
- テーマ２：米の品種選択
- テーマ３：道の駅の直売所
- おわりに：今後の取組み方針

水田の土地利用の変化

水田の土地利用はどのように変化してきたか

・水田では、主食用米、飼料用米、小麦、大豆、牧草など、**多様な作物**が作付け
・農家の高齢化・減少に伴い、作業受委託や農地の貸借も進んでいる
→同じ水田でも年によって、**「何を作付けるか」「誰が作付けるか」**は変わっている
・個々の水田における土地利用を、2019-2026年まで継続して追跡



主食用米



ねぎ



大豆

図1：水田の土地利用（2026年8月22日）

水田の土地利用の変化

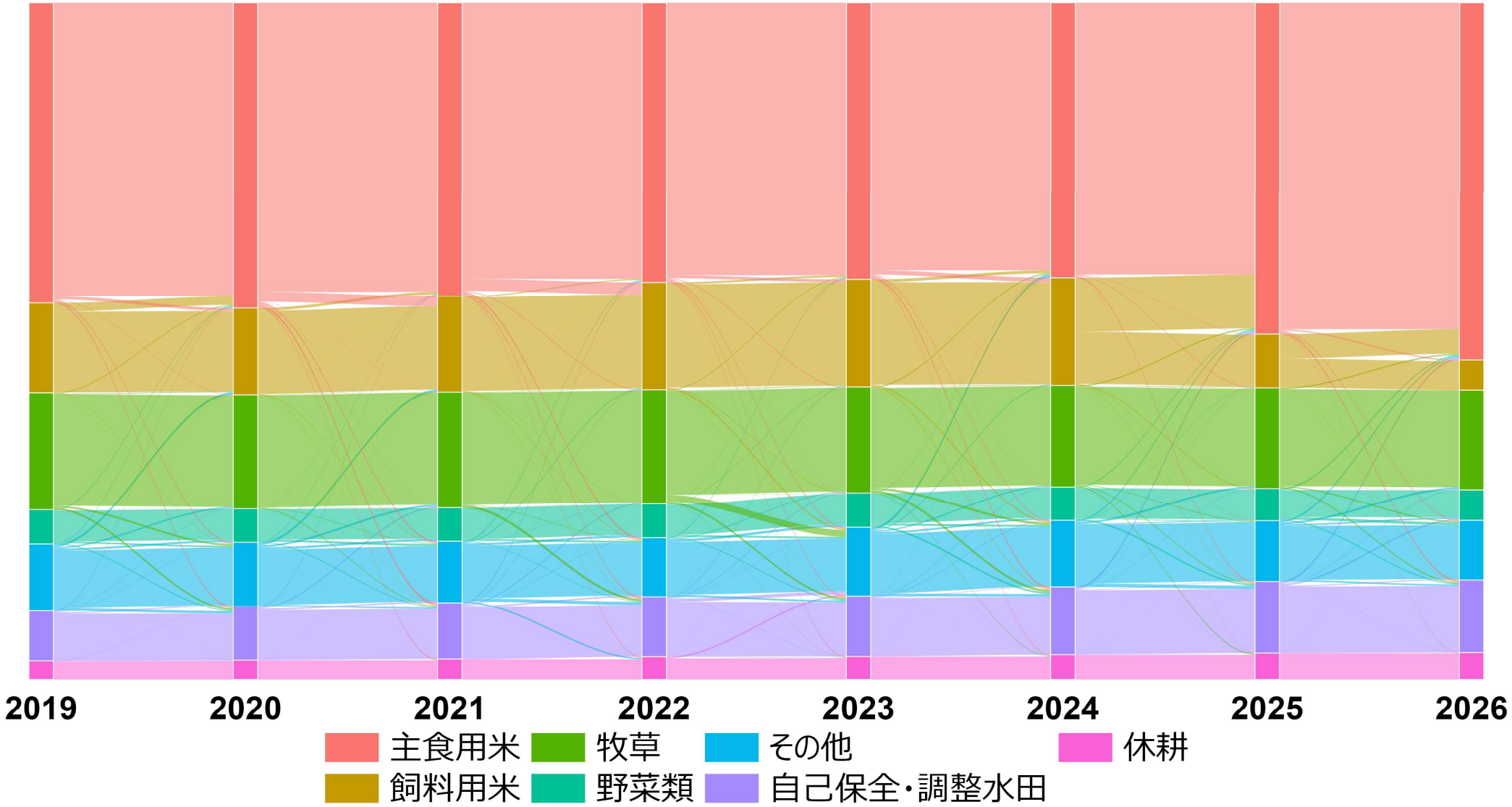


図1：水田の土地利用の変化（2019～2026年）

資料：盛岡市『水田台帳』

水田利用のこれまでとこれから

結果：8年間でみる水田利用

・2019年の水田16,423筆の約92%を8年間追跡
・約7割が、**8年間同じ土地利用**を継続
・米価格の上昇局面で、飼料用米から主食用米への転換

課題：担い手や農業をめぐる状況が変化するなかで、地域の水田を今後どのように利用していくのか

・データ分析：土地利用が継続・転換してきた水田の特徴
・現地調査・聞き取り調査：その背景にある担い手の意思決定
→土地利用の変化とその背景を踏まえ、**水田利用**を考える

中間報告会の内容

- はじめに：私たちの取組み
- テーマ１ ：水田の土地利用
- **テーマ２ ：米の品種選択**
- テーマ３ ：道の駅の直売所
- おわりに：今後の取組み方針

主食用米の品種選択

玉山地域における水稲作

・主食用米の作付経営体は775（2017年）から573（2025年）へ減少

・主な品種：銀河のしずく、あきたこまち、いわてっこ

→ **担い手が減少するなか、付加価値の高い品種の生産を拡大することは、地域の持続的な水田活用のために重要である**

利用するデータと分析方法

・盛岡市より、水田台帳・銀河のしずくの作付けに関するデータを提供いただいた

表1：主食用米作付けにおける銀河のしずくの普及率の推移

2019	2020	2021	2022	2023	2024	2025	2026
17%	17%	18%	25%	39%	50%	52%	55%

資料）盛岡市玉山地域の水田台帳をもとに報告者作成。
註）2026年の値は暫定値である。

主食用米の品種選択

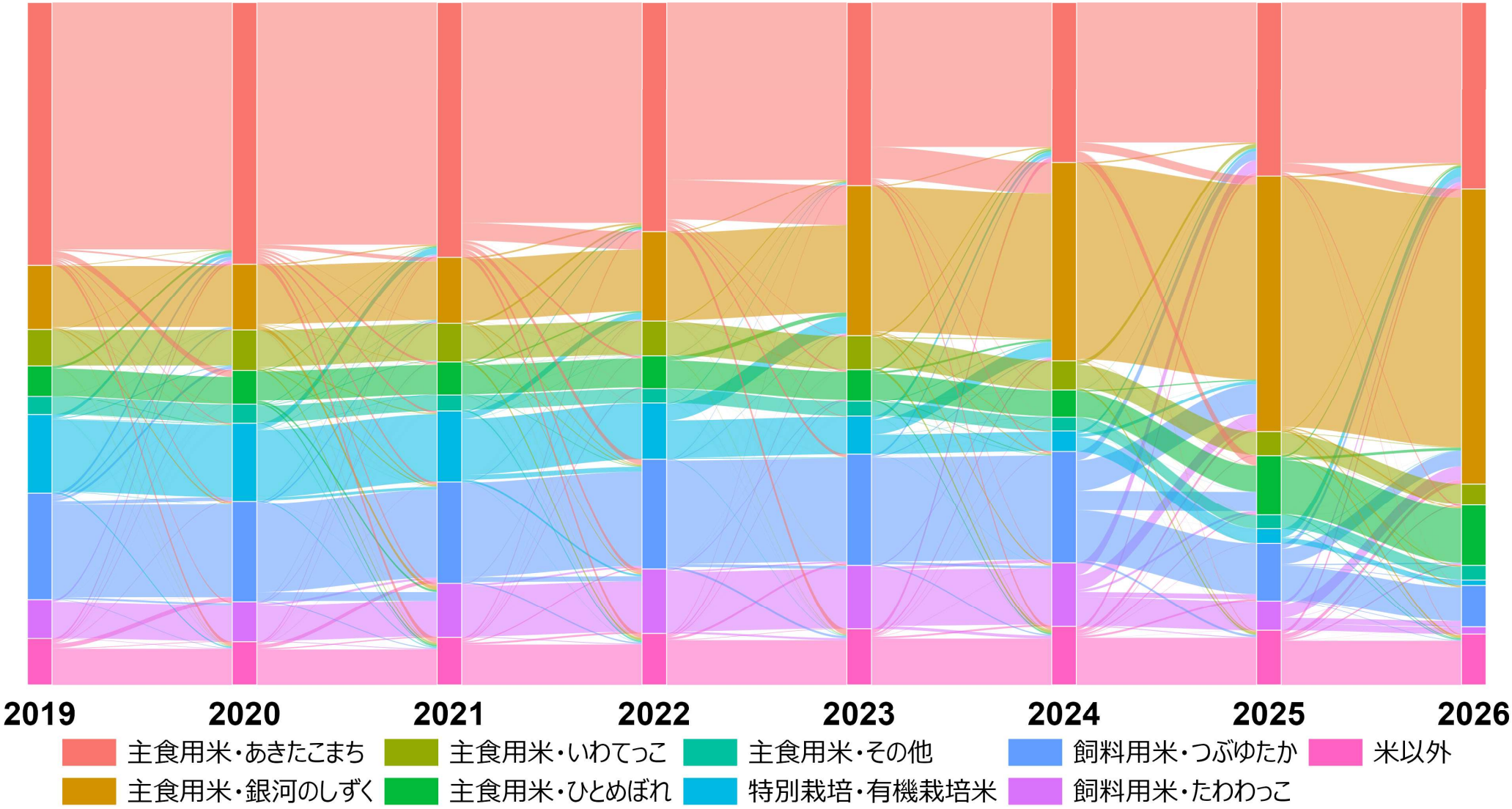
昨年度：「どのような農家が」銀河のしずくを作付けているのか

- **データ分析からわかったこと**
  - 2017～2022年度：大規模経営体が作付けの中心
  - 2023年度～：栽培基準の緩和、経営規模を問わず作付けが広がっている
- **聞き取り調査からわかったこと**
  - 栽培リスクに対応するため、一部の圃場から徐々に品種の切り替えを行っている
  - 作業の効率化のため、品種ごとに圃場をまとめて作付けしている
  - 出荷にあたってはタンパク含有率の基準が設定され、圃場ごとに出荷可否が決まる

今年度：「どのような地域で」銀河のしずくの普及が進んだか

- **銀河のしずくの作付けは、どのような地域で進んできたか？**
- **他の品種・品目との切り替えは、どのように行われてきたか？**

米品種の変化



図：米品種の変化（2019～2026年）

資料：盛岡市『水田台帳』
注：8年間で一度でも主食用米・飼料用米を作付けた9367筆を対象としている.

銀河のしずくの作付地域

銀河のしずくの地域別普及状況

- あきたこまちの作付けが多い、北上川流域の平野部を中心に普及率が高い
- 栽培基準緩和により、2023年より、栽培適地および作付対象経営体が拡大した

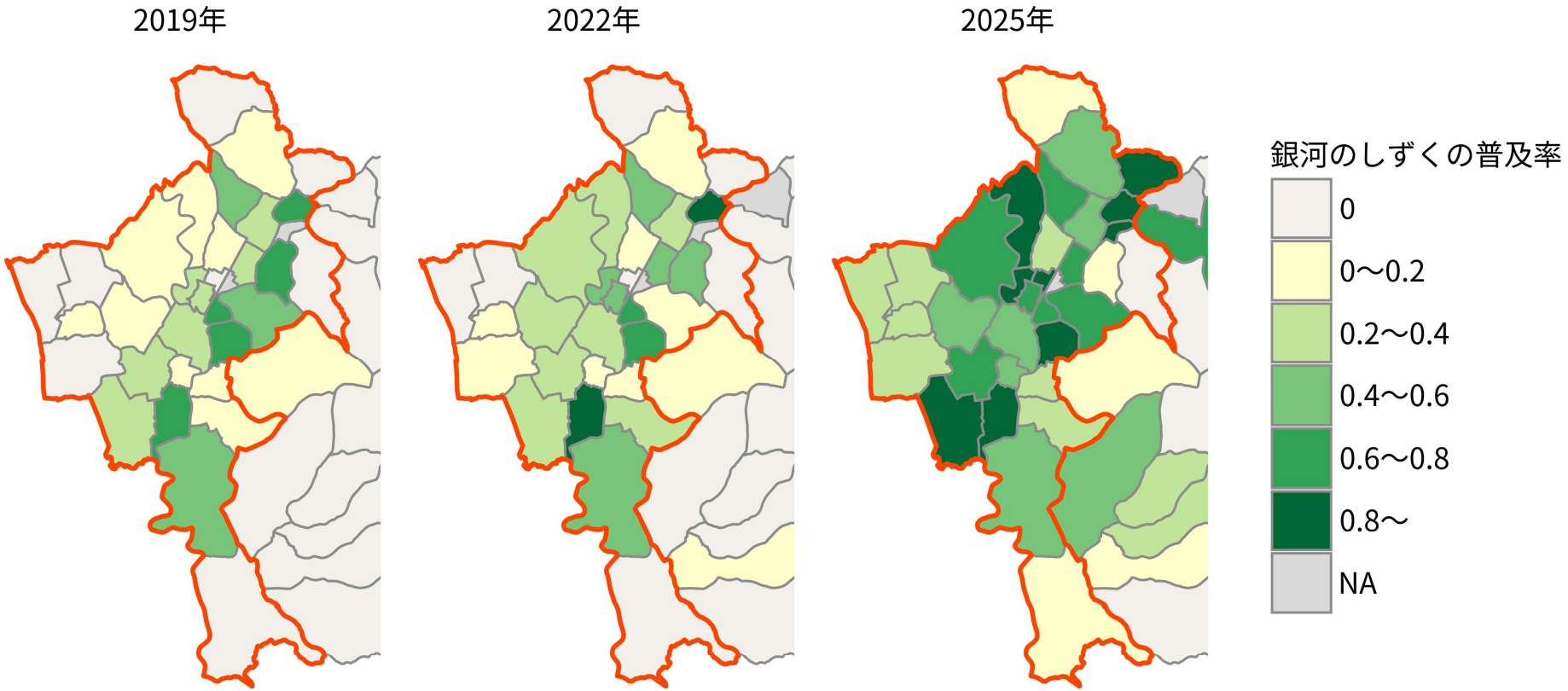


図2：集落別　銀河のしずくの普及率の推移

資料）盛岡市玉山地域の水田台帳・銀河のしずく栽培適地に関する資料（2021年度）をもとに報告者作成。
註1）玉山地域の一部を拡大した。また、赤枠は2021年度時点の栽培適地の範囲を示す。
註2）普及率は、主食用米作付面積に占める銀河のしずくの作付面積と定義した。

主食用米の品種選択

主食用米の品種選択に関する仮説

・あきたこまちから銀河のしずくへの転換が多いが、近年は飼料用米からの転換もある

→ 品種選択は、主食用米のみならず、**水田全体の土地利用**の中で行われている

・銀河のしずくの作付けは、栽培基準の緩和に伴い、より広範囲に広がっている

→ **適地の指定や栽培基準の変更**が、作付開始のタイミングに影響すると考えられる

・品種の作付けがまとまるのは、**作業の効率や圃場の条件**によるものと考えられる

→ **圃場の配置や分散の状況**が品種の選択にどう影響するかを、今後検討したい

今後の研究方針

・水田台帳データの分析に加え、岩手県や玉山地域への聞き取り調査を実施し、集落ごとの普及状況や作付けの実態を整理する

→ **地域の普及戦略と、農業者の品種選択の両方の側面から、普及状況を把握**

→ 産地としての今後の普及の進め方や、地域の品種構成のあり方を検討していく

中間報告会の内容

- はじめに：私たちの取組み
- テーマ１ ：水田の土地利用
- テーマ２ ：米の品種選択
- **テーマ３ ：道の駅の直売所**
- おわりに：今後の取組み方針

食品の流通形態の変遷

流通形態の見直しと農産物直売所の再注目

- グローバリゼーションの進展による大量流通システム（スーパー等）の拡大
- 1990年代頃～農産物直売所の再注目
  - ローカルフードシステムの評価（地産地消等）、コミュニティ活動の場、農村経済の多角化
- その数は増加しつつあったが、近年はやや減少傾向



→盛岡市では、道の駅「たみっと」の直売所が2025年4月に開業

道の駅「たみっと」をとりまく状況

道の駅に期待される３機能

出所：国土交通省「道の駅案内」

- 休憩機能
- 情報発信機能
- **地域連携機能** → この機能を担うため、**直売所**が併設されることが多い

「たみっと」併設の直売所の目的と課題

出所：盛岡市議会議事録より発表者作成

- 目的：豊かで活力あるまちをつくる産業の振興

  地域創生の拠点、地域住民の交流、地域経済の活性化
- 課題：近隣大型商業施設との競合

  持続的な品揃えの確保

  冬場の客足や出荷数の減少

→開業当初の話題性による来訪だけでなく、**継続的な利用促進**が重要

直売所に関する問題意識

直売所全般で指摘される課題

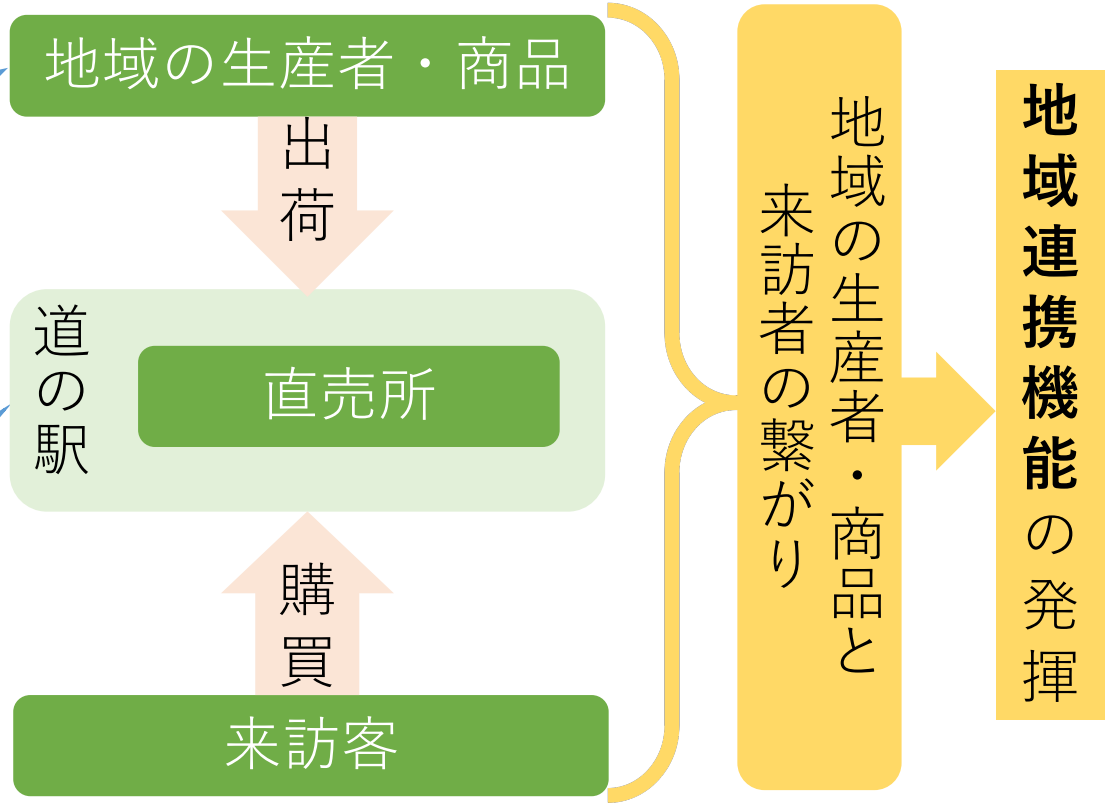
出荷者の減少・高齢化

冬季の落ち込み

安定した品揃えが難しい

供給体制の拡大の限界

大型化・外部集荷の傾向も



来訪者数や出荷者数を増やすだけでなく、

既存の商品・出荷者を活用した運営を検討していくことも必要

来訪者に関する分析

来訪客に関するリサーチクエスチョン

品揃えや売場構成の前提となる知見を得るため、来訪客の購買行動に着目

- 購買行動は開業後の一定期間で**どのように変化**するのか？
- **地域産品**が購買の中で**どのような位置づけ**にあるのか？

分析内容

- 2025/5（開業）～2025/12のPOSデータを利用
- マーケットバスケット分析を実施

  → **一緒に購買される商品の組み合わせ（併買傾向）**を抽出
- 組み合わせによるネットワーク図を作成し、その構造を把握



月別の併買傾向の比較①

全体的な併買傾向の比較 （図では5月と12月を例示）

- 全8ヶ月を通して、**野菜同士、和菓子同士**の併買が中心
- **がんづき**が和菓子から構成されるネットワークの中心に現れた

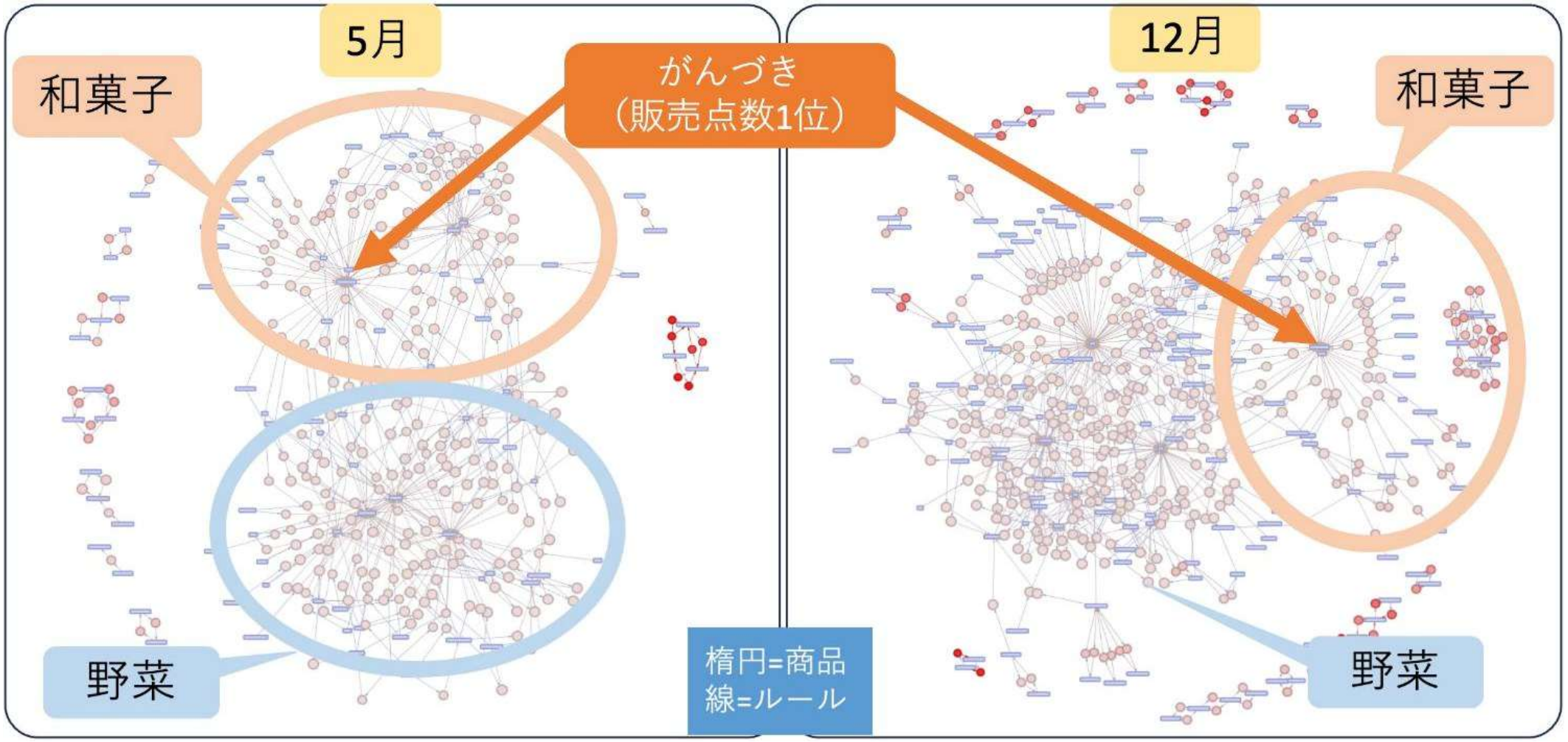


図4：併買ネットワークの比較（左：5月、右：12月）

月別の併買傾向の比較②

よりルールを限定したネットワーク図の観察結果 （図では5月と12月を例示）

- 月によって、併買傾向の**構造**は異なっていた
  - 5月：カテゴリごとの大規模な商品群（野菜、和菓子など）が中心
  - 12月：類似商品の小規模な商品群（チョコ菓子、焼き菓子など）が複数

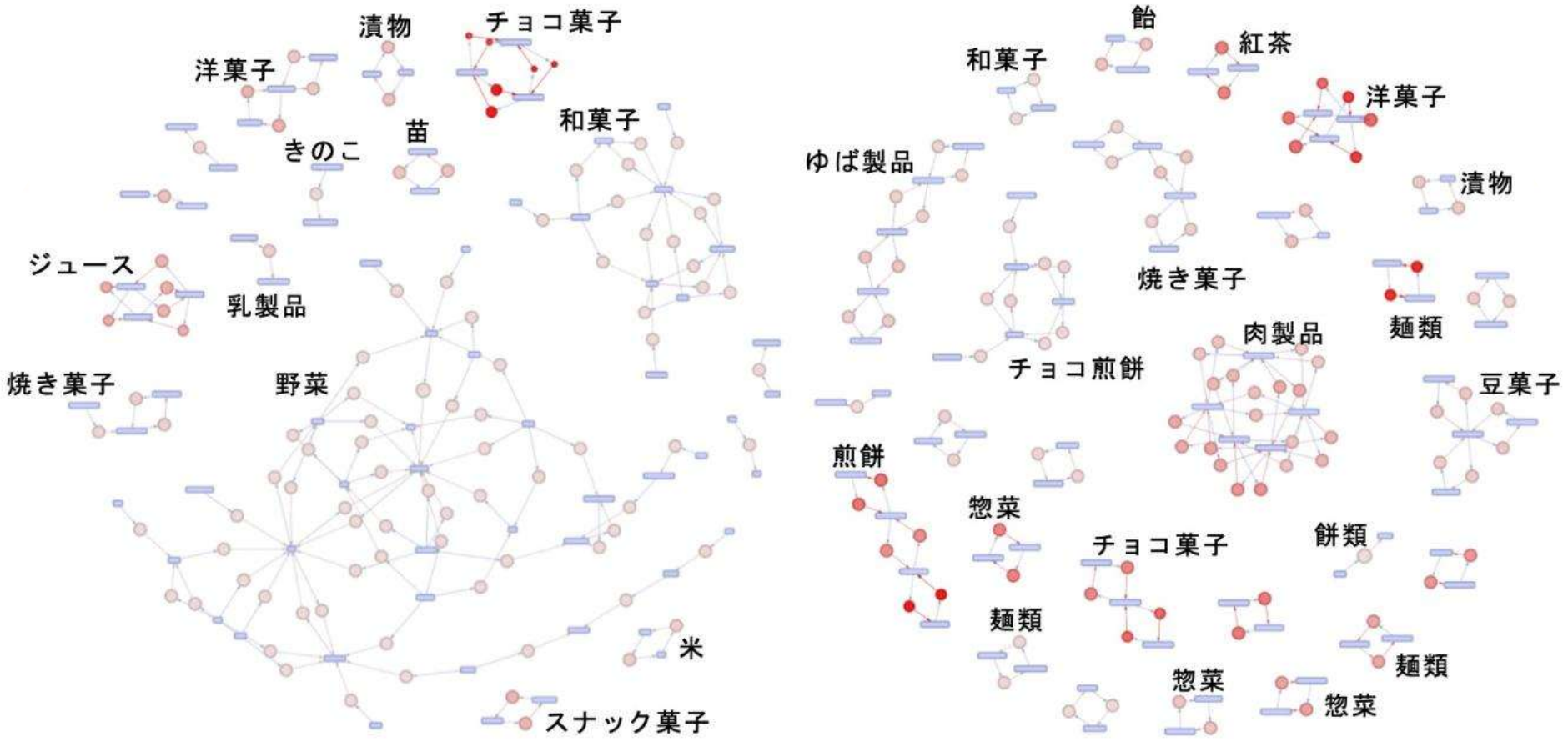


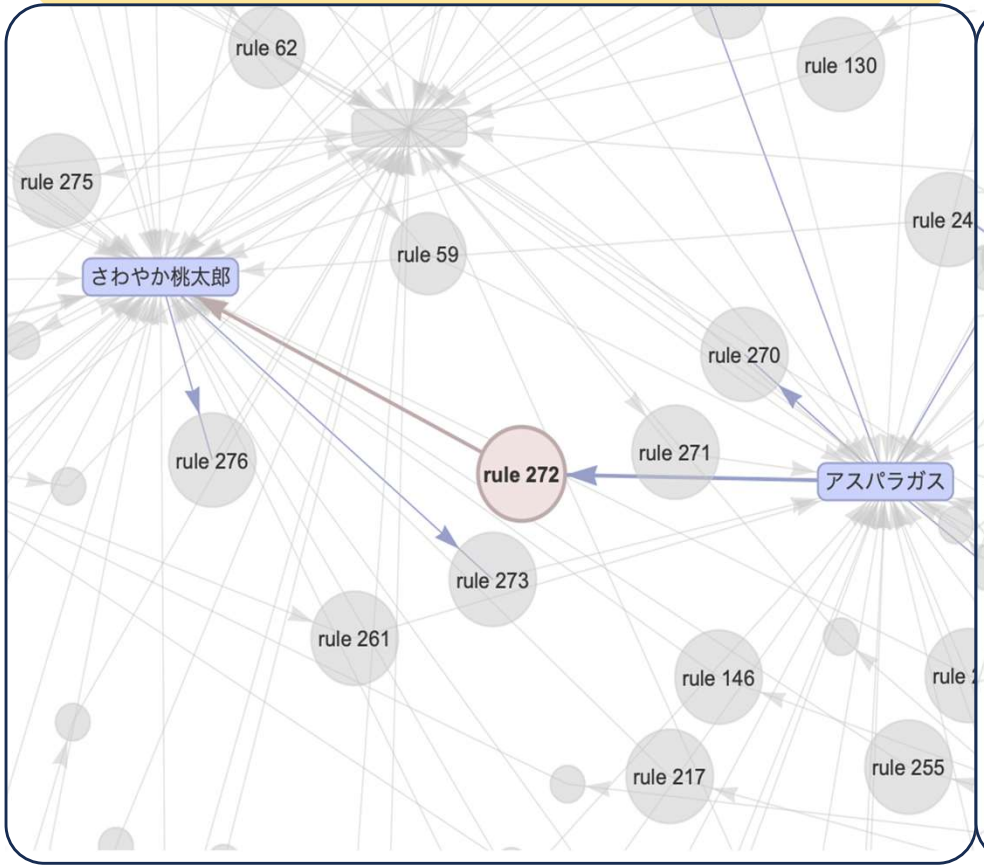
図5：併買ネットワークの比較（左：5月、右：12月）

月別の併買傾向の比較③

野菜のネットワーク図の詳細な観察結果

- 各月で**異なる季節野菜**の組み合わせがみられた

5月：アスパラガス → トマト



12月：ねぎ → 白菜

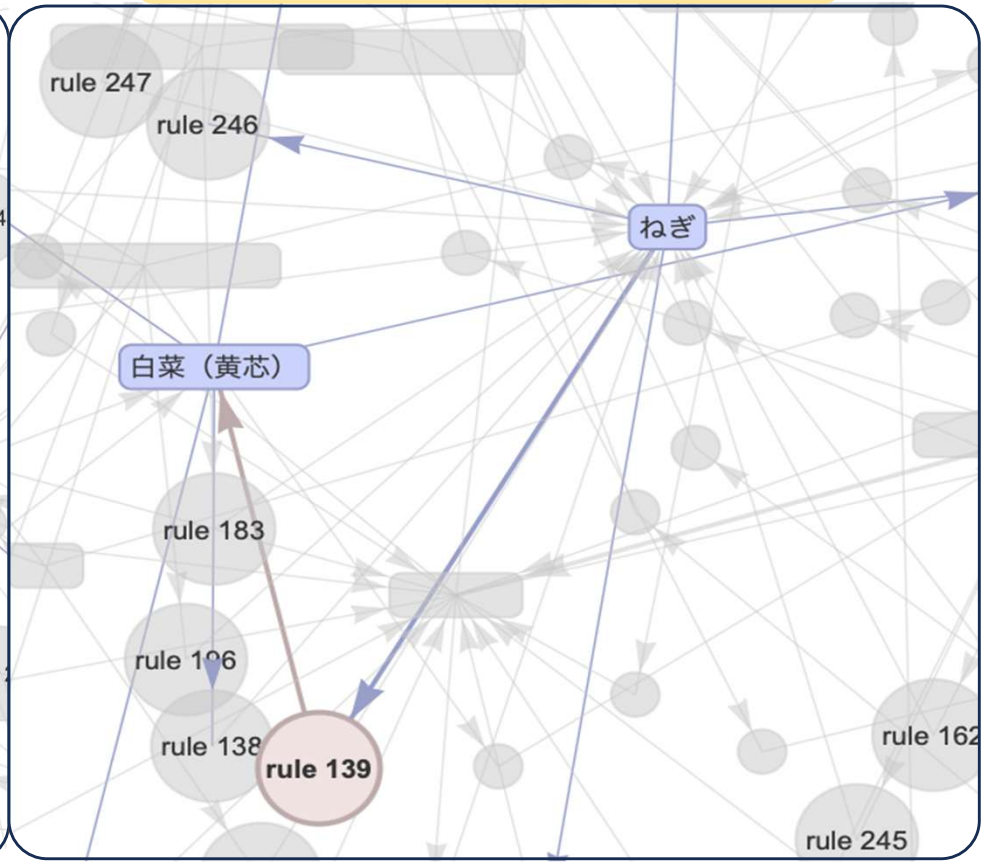


図6：5月と12月のルールの一部

来訪者に関する分析結果

購買行動は開業後、時間の経過に応じてどのように変化するのか？

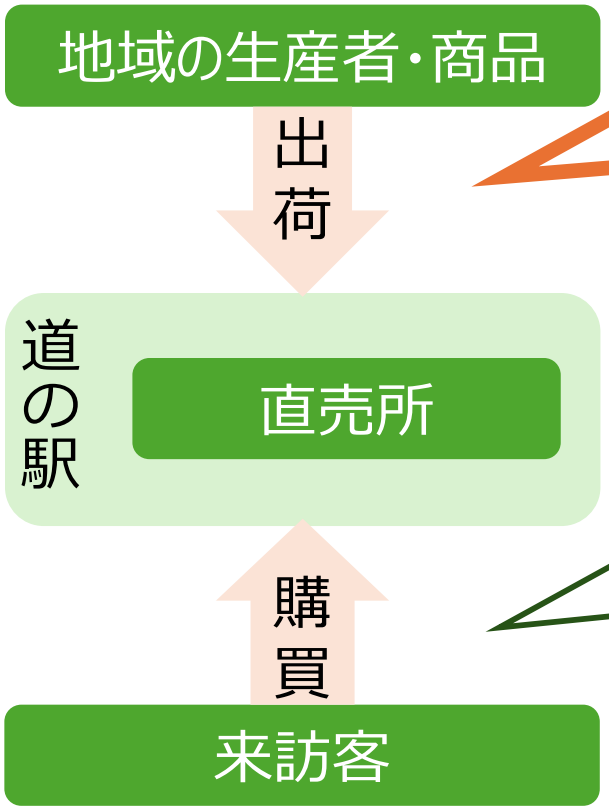
- 月によって、**商品間の結びつき方が異なる**可能性
  - 全体として、野菜同士、和菓子同士の併買が中心
  - 一方、5月～12月の間で、商品やネットワークの構造が異なっていた
- 特に野菜では、**季節に応じた品目の変化**がみられた
  - 商品の組み合わせに現れる野菜は月によって変化していた

地域産品が購買の中でどのような位置づけにあるのか？

- 複数の商品と併買されやすい商品が存在し、**がんづきは併買されやすい**商品である可能性
  - 地域産品の一つであるがんづきが和菓子のネットワークの中心に現れた

来訪客の併買傾向の**継続的**な把握と、
それを反映した**売場構成**や**品揃え**の検討が有効

出荷者に関する分析に向けて



今後の研究方針

限られた供給体制の中で、既存の**生産者**は
どのように商品の供給を維持・調整しているのか？
→**値引き**や**出荷数**について分析

来訪客がどのような購買行動をし、地域産品は
購買の中でどのような位置づけにあるのか？
→同一レシート内の**併買傾向**について分析

今後の研究方針

- 青果物の出荷者は、どのように出荷をしているのか？
- その出荷動向をとった理由は何か？（聞き取り調査）

中間報告会の内容

- はじめに：私たちの取組み
- テーマ１：水田の土地利用
- テーマ２：米の品種選択
- テーマ３：道の駅の直売所
- **おわりに：今後の取組み方針**

ここまでの調査・分析から

農地を維持しながら、どのように農業を続けていくか

- **水田利用：**多くの水田で土地利用が継続する一方、一部では作付けが転換
- **品種選択：**主食用米では、銀河のしずくの作付けが地域内で普及
- **農産物の販売：**直売所では、季節に応じた購買行動

今年度、さらに明らかにしていくこと

- **水田利用：土地利用の継続・転換をめぐる農業者の選択**
- **品種選択：地域の取組みや農業者の選択からみた、銀河のしずく普及の背景**
- **直売所：青果物の出荷をめぐる出荷者の選択**

地域農業を今後どのように維持・発展させていくかを考える